

豊明希望チャペル礼拝

2024/3/24

「神の相続人」

ローマ人への手紙 8 : 14~17

ローマ人への手紙 8 章から、教えられています。御霊について教えられています。前章の 7 章では、律法について教えられました。人は、律法的な生き方が出来るか否かで、神に祝されるか決まるというのが、イエス様以前の信仰者の考えでした。良い事をたくさんすればより祝され、そうでなければ、祝されないという事です。

7 章の終わりで、この書を書いているパウロは、この律法のやり方を、自分は実験してみたが、前々、出来なかったと告白しています。

そして、パウロを通して、神が私たちに教えているのは、律法ではなく、霊的な生き方をすることだと、言われるのです。

前回のところで、クリスチャンは、キリストの十字架の贖いによって救われたのだから、すでに、神の子とされ、神の御霊によって生かされているのだといい、だから、クリスチャンの生き方は、この御霊に徹底してとどまる生き方だと、律法ではなく霊に生きる、その生き方を示したのです。

それは、非常に徹底した言い方でした。今日は、14 節ですが、13 節にはこうありました。「8:13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬこととなります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きています。」と。

律法的な生き方、すなわち、肉によって戦う戦いは、必ず敗北であり、霊にとどまるなら勝利。もはや肉に義理はない、肉に死に、あなたが死なないなら肉を殺して、そうして、肉とは縁を切れというのです。



ドイツのディートリッヒ・ボンヘッフアー (1906~1945) は、ナチスによって捕らえられ殺されるのですが、彼は、こう言いました。

(クリスチャンにとって) 救いはタダだ。しかし、クリスチャン (弟子) であること(ありつづけること)は、コストがかかる。それは、献金とかのことを言っているのではなく、もっとはるかに高価な、コストのかかることです。こういう言い方をします。「救いはタダだ。しかし、クリスチャンであると言うことは、『あなたの人生すべて』というコストがかかることなのだ」と言いました。

先週の運営員の話し合いでは、2024 年度の聖句と目標の話し合いで、マタイ 16:24 「・・・イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしに

ついて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」で、年間目標は、『キリストにある使命を果たす』としました。

イエス様は、まさに、救いは一方的な恵みであるが、弟子として歩むなら、『あなたの人生すべて』すなわち、「あなた自身の十字架」自分がつくべき十字架、すなわち、死を覚悟して、命を私にささげよと言われたのです。

ボンヘッファーの著作の中に、『キリストに従う（服従）』という本があります。その中で「安価な恵みと高価な恵み」ということを対比しながら、聖書の教える本当の恵みについて、次のように述べている「くだり」があります。

「・・・安価な恵みとは、投げ売り品のような恵みである。投げ売りされた赦し、投げ売りされた慰め、投げ売りされた聖礼典のことである。・・・(時に教会では、)恵みが手軽にはばかりとなく、際限もなく、ぶちまけられる。それは、とりも直さず、代価のいらない、コストのかからぬ恵みのことである。・・・」

これは、福音の一方的恵みのことを言っているのではありません。すなわち、こう言います。「・・・安価な恵みとは、われわれが自分自身で手に入れた恵みである。・・・安価な恵みとは、主に従うことなき恵みであり、十字架なき恵みであり、生けるイエス・キリストなき恵みである。」と言いまして、律法主義的な生き方をする、生き方で、それを、教会が教えているというのです。福音によってすくわれたのに、「自分で手に入れる」律法的な生き方をすすめていると。

一方で、高価な恵みとは、「高価な恵みは、[福音書のイエスのたとえのように] 畑に隠された宝である。そのためには、人間は出かけて行って自分の持ち物を全部喜んで売り払うのである。それは、値段の張る真珠であって、その支払いのために商人は自分の全財産を犠牲にする。・・・さらにそれは、イエス・キリストの招きであって、それを聞いたとき、弟子たちは網を捨てて従うのである。・・・それは、人間の生命をかける値打ちがあるゆえに高価であり、またそうすることによって人間に初めて生命を贈り物としてあたえる（ゆえに）恵みである。」(『ボンヘッファーを読むー反ナチ抵抗者の生涯と思想』、宮田光雄著)

引用しなかった方がよかったかもしれませんが、要するに、教会は、福音は、タダだといひすぎるといふのです。タダじゃない。イエス・キリストの犠牲によって買い取られた、高価なものであり、それは、人間が、全財産をはたいても、買おうとするほどの高価な恵みだといふのです。

そして、言おうとしているのは、あなたも、全財産をはたいて買うくらいの覚悟で、キリスト教を買って下さい、クリスチャンである地位を買って下さいといふべきなのだと言っているのです。

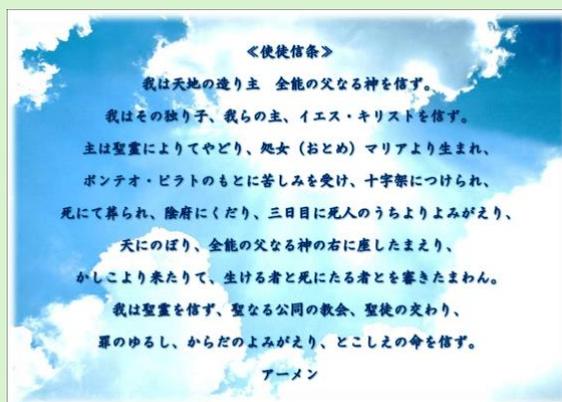
今日の箇所では、パウロは、その全財産をはいても買うべき福音が、どんなすごいのかを、別の言い方で語っているのです。それは、「神の子となる(される)」というすごい、高価な恵みだといふのです。

「8:14 神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。」

まず、ざっくりと言って、クリスチャンは、すなわち、御霊に救われ導かれつつある人は、「みな」例外なくという意味です。「神の子ども」だといふのです。

先日、金曜日の聖書の学び会で、私は、「神のこども」と言い、天地万物を創られた神を「父」と呼ぶのは、旧約聖書では、ごく少数の、選ばれたダビデやソロモンが、言ったのみので、基本、それは、不敬罪であり、むしろ、死罪にもあたる罪だと言いました。

それを、イエス様は、弟子達に、キリストの与える救い、その結果としてのクリスチャンの立場は、何より「神の子ども」であるという恵みだと説明しまして、イエス様が、主の祈りを弟子達に教えたとき、弟子達は、驚き、ユダヤ人に聞かせられない、殺されてしまうような内容だったと言いました。



特に、主の祈りの最初のこのことばです。「天にまします我らの父よ」です。

この驚くべき恵みの一言を教会は、柱として生き、迫害の中でも、たより、命をかけて、この恵みを死守したのです。それは、紀元 100 年には、初代教会にはすでに成立したという、「使徒信条」と言われる告白にも、このようにあり

ます。

「我は天地の造り主 全能の父なる神を信ず。」神は父ですから、死んでも、天国の父に迎えられるのであり、これこそ、ボンヘッファーのいう全財産をかけて、あるいは、死を賭しても手に入りたい、手に入れた高価な恵みです。

「父なる神」とクリスチャンが呼べることこそは、まさに、それは、私が死ぬか、あなたが死ぬかと言うほどに、全命をかけていい恵みなのです。次の聖句を読みます。

「8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」

この場合の霊とは、この場合、私たちの人格そのものであり、その私の中心を占めるもの、すなわち霊のことです。

その霊は、その人格の中心は、奴隷根性ではなく、神を父と呼ぶ、父の愛に満たされた、愛された子供のそれ(心)だと言うのです。

ここで、「アバ」と言うことばが出てきます。これは、ヘブル語（アラム語）のおとうさん、パパという言い方です。ギリシャ語でもイタリヤ語でもなく、それは、パウ

口が、幼い頃から、父親に、「とうちゃん、あれ買って、これ買って」と、わけもなく、わがままをいい、甘えてきた、その言い方なのです。

ところで、新約聖書の中で、このアラム語がそのまま、使われているのは、他に、アーメン、ハレルヤ、そして、マラナタがあります。相手がローマ人か、ローマの言葉しか理解出来ない異邦のユダヤ人であろうかと思いますが、この4つのことばは、いわば他の言葉には代えがたい重要な言葉であったからあえてそのまま使われています。それは、彼らクリスチャンのアイデンティティーというか、これ以外の言葉では表せられない、そういう重要な言葉であったのでしょうか。「アーメン」はその通りという意味ですが、キリストが十字架で罪を贖って下さった、それゆえに負債は返済された。罪から解放された、確かに、そういう意味でのアーメンであります。ハレルヤは、「神を褒め讃える」讃美であります。そして、マラナタとは「主よきたりませ」という意味です。この三つは、過去、すなわち、アーメン、現在、すなわち、ハレルヤ、未来、すなわち、マラナタと言う、キリスト教のすべての思想を網羅していると言われます。そして、その3つに加えて、4つめとして、おそらく、今の三つのそのすべてを表し、また、あるいは、それらに勝る言葉として、アバは、クリスチャンにとって、変えることの出来ない大事な言葉だったという子です。すなわち、私はイエス様は、私と神さまは、この関係の中で結ばれているということです。聖霊が、私にそう言うようにゆるしてくれた、命にかえても、大事な言葉、大事な関係、その意味を込めた、アバだということです。

最後の節を読みます。「8:16 御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証ししてくださいませ。8:17 子どもであるなら、相続人でもありません。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」

神の子、その神との関係は、神の相続人としての子供だとパウロは言いまして、ただ、精神的に？愛されているという意味だけでなく、神の財産を引き継ぐ立場としての正式な？子供だと言います。

教会学校で、お金持ちは、金の腕時計や、高い車を持っています(古い例・・・)ね、と言い、ところで、点の父なる神は何をもっている？って、子供たちに聞くと、しばらく考えていて、宇宙とか、全部とか言います。宇宙・・・私たちは、夜、天を見上げると沢山の星が見えますね。ある時、あれ、星って、色があるって、はじめて気づいたことがありました。そうやって良く見ると、赤い感じの星、黄色い感じの星、青い感じの星があります。色々調べていたら、ある学者(イエール大学とフランスの学者)が、比較的地球に近い、かに座 55e は、ダイヤモンドでできているとみられる星であると発表しました(2012年10月12日)。そんなふうに調べていたら、星雲全体が金で出来ていると言うのもあるんだとか・・・

すごい金額になるね。というか、金とか相場が大暴落するね・・・なんて考えていました。黙示録に描かれている、大通りは金で、城壁がサファイヤ、エメラルドというのも、単なる譬えではなく、象徴的な意味でなく、そのままの言葉かも知れない・・・なんだか早く天国に行ってみたくなった・・・のです。

たしかに、私たちは、天国が楽しみになるほどに、将来も、そして、今も多くの愛と恵みを受けています。しかし、であればこそ、わたしの人生を、神に自由に使っていただいて、人と神のために生きる事を望む、それが喜びであっても、たとえ苦しみであっても、神の子であることを感謝し、だからこそ、使命に生きる。そうすべきだと、少なくとも、そういう考えを持つべきだと、パウロは言うのです。

また、パウロは、あえて、キリストとともに、あなたも、子供であって、「共同相続人」だと言います。キリストのもっておられるものはすべてあなたの物でもあると。

さて、御霊によって、子とされるここでいうこと、その恵みは、これほどのものだと言うのです。ボンヘッファーではありませんが、それは、半端なく高価すぎて、神の子となるために、殺人事件でも起きそうな程、人の気もおかしくなりそうな程、まさに、命をかけてもいい、一生、そのために働いてもいい、どんな努力でも惜しまない、高価な恵みだと言っているのです。

大阪で神学生生活をしているとき、泉の家聖書教会の M 先生が、もう一人神学生の先輩のことを、あなたは、貧しいのに、いつも金持ちのように見えると言っていたことを思い出します。私も同意しました。彼は、いつも余裕があって、苦しいことがないみたいなのです。そして、その時、思ったのは、私のことです。私は、いつも暗い貧しい顔をしていないだろうか。さて、今日は、私たちは、神の子、まさに裕福な神の子の恵みのなかにいると教えられました。顔を輝かせ、感謝と讃美のうちに、苦しみをさえも喜び受けて、この週も、神と人との、身を献げ、神の栄光を表していく歩みとさせていただきましょう。